

Title	歯科に於ける局所麻醉法に就て（其の四，完）
Author(s)	遠藤，至六郎
Journal	齒科學報，35(8)：935-938
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/1681">http://hdl.handle.net/10130/1681</a>
Right	

## 學會講演

### 齒科に於ける局所麻醉法に就て (其四、完)

(東京齒科醫專校同窓會、東京府齒科醫師會聯合學術講演會に於ける講演筆記)

教授 醫學博士 遠 藤 至 六 郎

唯今より撮影致します映畫の考案者フキッシャー教授は御承知の如く局所麻醉學の權威ブラウン教授と相併んで齒科局所麻醉學の世界の權威であられ、其快著「齒科に於ける局所麻醉學」が斯界の進歩發達に向つて絶大の貢獻を與へつゝある事は既に御熟知の通りであります。(是より暗室となる)

第一 茲に寫りましたのは注射後に關する條件であります。大體は前述致した事項と同様でありまして茲では反應中性ミ等滲壓、等「イオン」の諸點を特に力説してあります。

第二 此寫眞はウエルム氏「アンブル」であります。斯様に此「アンブル」は普通の「アンブル」を縦に二個連接した場合と同様の形狀を呈して居り、一方にリンゲル氏液が入れてあり他方には「ズブラレニン」ミ「ノヴォカイン」ミが小さき錠劑の型に入れてあり、「アンブル」の狹窄部は易溶合金で連結してあります。使用に際しては斯様に「マツチ」「アルコールランプ」又は小「アンゼン」燈の細き火焰で狹窄部を僅に熱します。するに合金が熔けて斯様にリンゲル氏液が全部他方の「アンブル」に突入し同時に瞬間的に溶液となり得るに云ふ點にあります。即ち此「アンブル」の特徴は新鮮狀態の理論的成分を有する注射液及び各患者毎に即時に調製し得るに云ふ點にあります。私は六年程前にフキッシャー教授の命によりてウエルム氏から此「ドツベルアンブル」を寄贈して頂き其後獨逸から購入して使用して居りましたが近年

は使用致さず専ら安井教授調劑に係るもののみを使用して居ります。主なる理由は此「アンブル」は價格高く日本では使ひ切れませんのこ、もう一つの理由は「アンブル」の製作法が不完全であるのか又は貯藏法が悪いのか判然致しませぬが、六ヶ月位経て出して見るに赤褐色に變色して居るのを相當數發見致しました爲であります。

次に現れて参りましたのはホイブライン氏の「イソドッペルアンブル」であります。御承知の如く局所麻醉液の溶媒に就きましては前述の如く大體に於て二大學派が御座います。ウエルム氏の「ドッペルアンブル」はリングデル氏液で此「イソドッペルアンブル」はザイデル氏の考に従つて食鹽水を溶媒として居ります。而して此二種の「ドッペルアンブル」に關しては大體次ぎの二點が論争の中心點をなして居る様であります。即ち第一は前述した如く溶媒としてはリングデル氏液に食鹽水はさちらが果してよいか云ふ事でありまして、第二はウエルム氏のもの「アンブル」間の連接が易溶合金であるのに此「イソ」の方は兩者の連結が御覽の如く硝子棒である。従つて注射液が金屬に觸れぬからより理論的である云ふ點がウエルム氏の「アンブル」に比して優れる點である云ふ事であります。

第三 これはフキッシャー教授考案の注射器一組であります。全部金屬性で高壓注射に對して特に優秀なりと言はれて居ります。此注射器は先年花澤博士の御骨折で日本に澤山隨分安價で輸入せられた事がありますから御なじみの方も居らるゝ事と存じます。それでも相當高價でありますから日本では一般的には尙ほ不向きであると存じます。

第四 針の尖端の具ふべき條件即ち形狀を示して居ります。針の尖端の形狀、換言すれば斜面の緩急は注射針の組織内進入の難易及び患者の感する疼痛の輕重に至大の關係があります。故に種々の研究が發表せられて居ります。中央のものが最も理想的であるとせられて居ります。

第五 次ぎは注射針尖端の斜面は必ず組織面に向けて注射すべきであつて斯様に斜面を上方に向けて注射してはならぬ云ふ事實を説明して居ります。斯くの如く上方に向けて刺入するに注射針端が往々にして寫眞の如く曲がる

恐れがあります。

第六 注射部位は嚴重に消毒せねばならぬ。云ふ事を實際に示したものであります。「ヨード」丁幾は此目的に最も適合した藥品であるに信ぜられて居ります。若し注射部位を消毒せぬに恐るべき感染が成立する事がある譯であります。此處に寫りました試験管は這般の關係を示した細菌學的研究成績の一端であります。此問題は嘗て英國のローランド氏が實驗し其成績を英國齒科雜誌に發表し大に斯界の注意を喚起した事がありました。即ちロ氏によれば「ヨード」丁幾は著効なしに云ふのであります。然し中井博士指導の下に私の教室に居りました井上學士が試験せられた成績によりますに確實に殺菌効果を示して居ります。従つて注射部位の消毒薬として「ヨード」丁幾を推舉する。フセッシャー教授の説に私も賛成であります。

第七 これは上下顎骨竝に齒牙に分布する神經即ち三叉神經の走行竝に分布経路状態であります。御承知の事實でありますから説明を省きます。次ぎは同じく血管分布状況であります。

第八 此表は齒科に於ける全身麻醉に局所麻醉法の應用頻度に關する過去約五十年間の變遷の有様を示したものであります。此表の如く最近約二十年來は全身麻醉を應用する事が殆んまなく凡て局所麻醉で解決して居る有様で御座います。之は要するに局所麻醉殊に傳達麻醉法の發達に由來するものであります。御互に同感であります。私自身も今より約十五年前迄は大概の手術は全身麻醉で施行して居りましたが最近では大多數は局所麻醉で片付けて居りまして、二三極めて特種の患者に對してのみ「バントボーンスコボラミン」に「エーテル」の併用による全身麻醉を行ふのみであります。此寫真には關係ありませんが序でありますから申上げます。それは斯の如く齒科に於ては局所麻醉が發達して全身麻醉の應用を殆ん完全に驅逐して居るかの様に見受けられますが、然しよくよく觀察致しますと世界的に然り云ふ譯には參らぬ様であります。即ち英國や米國に參り又は日本に渡來して間もない様な英米人が吾人の許

に参ります。現在尙ほ抜齒は全身麻酔でやるものであると言ふ風に堅く信じて居る人が相當澤山居るのを目撃致す事實であります。従つて英米では現在でも亞酸化窒素麻酔の應用が相當根底を有して居る様に見受けられます。日本は御承知の如く全身麻酔の旺んなる應用期を経ずして一足飛びに傳達麻酔の應用期に移つた譯であります。

第九 以下映寫致しますのは注射方法であります。即ち最初は浸潤注射法であります。浸潤注射に於て特に注意すべき點は各筋の附著點に針を刺入して液を其儘注入せぬ事であります。次ぎには御覽の如く齒間乳頭内へ深く針を入れて注入する事であります。此方法は抜齒に際して殊に有效で寫眞の如く骨組織内に液がドン／＼深く浸入して参ります。

各齒牙に就て夫々注意すべき點を示して居ります。次ぎは上顎及び下顎の傳達麻酔術式であります。御覽の様に大體は私が先刻御話致した事と同じでありますから説明を略します。ゆつくり御觀覽を願ひます。(終り)

(注射に關する映畫の大體を圖にて示す豫定なりしも重複の恐れある爲省略せり、記者)

## 齒槽切除術殊に義齒裝置前準備としての術式に就て

(第十一回同窓會例會に於て)

東京齒科醫學士 岩 澤 易

演題が餘り平凡なので何か新しい方法もがなと思ひ最近の文獻を翻しては見ましたが、此れは云ひ得る様な方法も見あたりませんので、私共の外科學教室で行つて居る方法二三を御紹介致しまして私の責を盡し度存じます。

齒槽切除術とは、申すまでもなく齒槽の硬軟兩組織又は其の一方の畸形及び異狀部分を外科的に切除する云ふ事